

390

乳癌患者における全身 ^{18}F -FDG PETと骨シンチグラムの比較検討

鈴木 豊、那須政司（東海大放） 安田聖栄、井出 満、正津 晃（山中湖クリニック） 久下壮一、徳田 裕（東海大外科）

^{18}F -FDGによる腫瘍PETの報告は多数あるが、乳癌患者における骨シンチグラムと比較した報告は少ない。我々は、1994年9月より1997年3月末までにFDG PETと骨シンチグラムを一カ月以内に施行し得た乳癌患者46症例の56検査を対象に、両検査の骨における所見の有無およびその部位について比較したので報告する。33検査は両者とも異常所見なし、12検査は両者とも異常所見ありと判定された。11検査では、両者の所見に解離が認められた。以上の結果をもとに、両検査の所見解離例を中心に乳癌患者の経過観察におけるFDG PETの臨床的意義について考察する。

391

Tc-99m MIBIの乳癌への集積に周囲正常乳腺への集積が及ぼす影響の検討

藤井博史、中村佳代子、橋本順、久保敦司（慶大・放）

乳癌組織へのTc-99m MIBI (MIBI) の集積はP糖蛋白質の発現を反映するが、in vivoの乳癌の撮像では周囲の正常乳腺への集積の影響が加わる。

13症例の乳癌患者を対象とし、正常乳腺のMIBIの洗い出し率を乳腺撮影の所見と比較した。さらに、正常乳腺の洗い出し率を差し引いた乳癌自体の洗い出し率と乳癌のドキソルビシン感受性とを比較検討した。

乳房のX線透過性が高いほど、正常乳腺からの洗い出しが強く、乳癌自体の洗い出し率に与える影響が大きかった。また、正常乳腺の洗い出し率を差し引くことで、乳癌の洗い出し率とドキソルビシン感受性との相関がより明瞭となった。乳癌へのMIBIの集積の評価には、正常乳腺の集積の影響を除外する必要がある。

392

Tl-201 SPECTによる乳癌診断5年後の転帰
池上匡、小池繁臣、斉藤節（横浜南共済病院放）
松原升（横浜市大放）

1991年8月から1992年7月に、Tl-201 SPECTによる乳癌の術前検査を受けた患者48人の5年後の転帰について検討した。SPECT検査は111MBqTl-201を静注し、15分と4時間後に撮像した。腫瘍と肺野にROIをとり、そのカウントの比をT/N比とした。5年間に転移を起こした症例は48人中11人で、その早期像でのT/N比の平均は1.77、転移のない37人中、腫瘍への集積のなかった5人を除いた32人では1.21であり、有意な差であった。無転移群のうちT/N比が1.8以上は1例のみであったが、転移群では5例あり、うち4例が死亡した。しかし腫瘍断面の最大径で除した補正值を用いるとこれらに有意差はなかった。Tl-SPECTは乳癌の予後の推定に有用であるが、部分容積効果の影響につき検討が必要である。

393

分化型甲状腺癌におけるヨード内用療法の臨床的検討

磯部優子、山本由佳、中野 覚、高橋一枝、西山佳宏、高島 均、田邊正忠（香川医大放） 川崎幸子（麻田総合放）

分化型甲状腺癌の治療効果及び予後について、転移部位、組織、年齢、サイログロブリン別に比較検討した。

対象は1984年11月～1997年4月に当科にて ^{131}I 内用療法を施行した分化型甲状腺癌患者121例で、組織型別では乳頭腺癌101名、濾胞腺癌20名であった。頸部、縦隔リンパ節転移は17例、肺転移は38例、骨転移は11例であった。方法、投与量は当院のプロトコルに準じた。良好な集積を示したのは骨、濾胞癌、若年者であった。一方、治療効果不良例は ^{131}I の取り込みがなく、死亡例が多かった。サイログロブリンは骨転移、肺転移、リンパ節転移の順に高い傾向にあった。

394

甲状腺分化型腺癌の転移症例に対する ^{131}I 内照射療法の検討

早川和重、川島実穂、高橋健夫、早川佳代子、三橋紀夫、新部英男（群大放）

甲状腺分化型腺癌の転移症例に対する ^{131}I 内照射療法の治療成績について検討した。対象は ^{131}I 内照射療法を行った甲状腺癌転移症例36例で、 ^{131}I の一回投与量は3.7GBqを原則とし、投与間隔は3か月以上あけて行った。

全症例の初回治療からの5年、10年生存率は88%、65%で、 ^{131}I 内照射からの5年、10年生存率は64%、43%であった。組織型別5年生存率では乳頭癌61%、濾胞癌67%と有意差はみられなかった。転移部位別では肺転移例が骨転移例に比し5年以上の生存率が高く、 ^{131}I 集積群の方が非集積群に比し予後良好であった。 ^{131}I 内照射療法は甲状腺癌転移症例に有効な治療法であり、とくに微小肺転移症例では長期生存も期待できる。

395

$^{99\text{m}}\text{Tc}$ - ^{201}Tl dual SPECTによる甲状腺腫瘍シンチグラフィの有用性についての検討

遠山 敬司、アリ.S.アルバブ、新井誉夫、荒木 力（山梨医大放）

Dual SPECTを施行する事によって、病変の存在診断能の向上と良悪性鑑別能の向上が図れるかを検討した。

甲状腺腫瘍が疑われる18名に対し dual SPECTを施行し、同時に従来のplaner像も撮像した。局在診断を両者で比較した。また、 ^{201}Tl SPECTではearly uptake ratio (EUR)とdelayed uptake ratio (DUR)を測定し、両者からretention index (RI)を算出した。washout ratio (WR)についても検討項目に加えた。小さな病変の局在診断においては明らかに dual SPECTが勝っていた。またWRが正常部位より低く、かつRIが1以上を示したものを悪性腫瘍とした場合、正診率が向上し、dual SPECTの有用性が示唆されたが、完全な診断をするには至らなかった。